

使い方の観点からみた 対のある自他動詞

—現代日本語書き言葉
均衡コーパスを利用して

伊藤秀明

◆要旨

目 本語学習者にとって対のある自他動詞は習得が難しいとされる文法項目の1つである。そこで本稿では、対のある自他動詞の理解を促進させるために「状況把握の自他動詞」と「状況報告の自他動詞」という分類をし、「あくーあける」「あいているーあけている」「決まるー決める」「決まっているー決めている」「壊れるー壊す」「壊れているー壊している」の8つの対について、コーパス調査を行った。その結果、状況把握の自他動詞と状況報告の自他動詞を区別することで、状況把握の自他動詞では「場面転換」、状況報告の自他動詞では「状況の連続性の描写」を示すことができることを述べた。

◆キーワード

対のある自他動詞、状況把握、状況報告、文法の使い方、BCCWJ

◆ABSTRACT

In this paper, I executed a corpus survey with a new classification called “transitive-intransitive verbs indicating situation grasp” and “transitive-intransitive verbs indicating situation report” to promote the understanding of transitive-intransitive verb pairs. First, I described how transitive-intransitive verb pairs can be divided into “transitive-intransitive verbs indicating situation grasp” and “transitive-intransitive verbs indicating situation report”. Next, I utilized BCCWJ’s “Chunagon” and investigated how to use “transitive-intransitive verbs indicating situation grasp” and “transitive-intransitive verbs indicating situation report”. As a result, by distinguishing “transitive-intransitive verbs indicating situation grasp” from “transitive-intransitive verbs indicating situation report”, I revealed that “transitive-intransitive verbs indicating situation grasp” can demonstrate “a scene change” and “transitive-intransitive verbs indicating situation report” can “depict the continuity of a situation”.

◆KEY WORDS

transitive-intransitive verb pairs, situation grasp, situation report, grammar usage, BCCWJ

Transitive-Intransitive Verb Pairs
in Terms of Usage
Using the “Balanced Corpus of
Contemporary Written Japanese”
HIDEAKI ITO

1 はじめに

第二言語として日本語を学ぶ学習者にとって、日本語の対のある自他動詞^[註1]は「難しい」「うまく使いこなせない」と感じる文法項目の1つとして指摘されている(小林1996)。自他動詞の研究は古くから語彙・統語・意味的に研究がなされており(本居1828, 奥津1967, 寺村1982, 早津1987など)、その後、日本語教育の分野でも日本語学習者(以下、学習者)の自他動詞の習得研究(小林1996; 小林・直井1996; 中石2005a, 2005b; 伊藤2012a, 2012bなど)が行われている。しかし、多種多様な研究がなされている一方で、日本語学習者は現在も「自他動詞は難しい」と頭を悩ませており、日本語教育においてより効果的な説明が求められている状況にある。そこで本稿では、対のある自他動詞の「難しさ」の要因を少しでも取り除き、学習者の対のある自他動詞に対する理解を促進させるために、「状況把握の自他動詞」と「状況報告の自他動詞」という新しい分類でコーパス調査を行い、その用法について考察を行う。

本稿の構成は、本節に続く2節で日本語の対のある自他動詞が状況把握の自他動詞と状況報告の自他動詞に分けられることを述べ、3節でコーパス調査から、書き言葉における状況把握の自他動詞と状況報告の自他動詞の用法について考察する。最後に4節で本稿のまとめと今後の課題について述べる。

2 「使い方」の観点からみた対のある自他動詞の特徴

伊藤(2012a)はKYコーパスの中国人学習者のデータから、伊藤(2012b)は中国人学習者への文完成タスクとフォローアップインタビューから、対のある自他動詞の習得状況をそれぞれ調査した。その結果、対のある自他動詞の課題として形態的な混同による難しさに加え、コンテキストによって非意図的な事態であっても、意図的に行った動作であるかのように表現する(1) a. b.のような語用論的知識を伴う使用が学習者にとって難しいことが述べられている。

(1) a. ごめん、借りてた本、少し破れちゃった。

b. ごめん、借りてた本、少し破いちゃった。

この語用論的知識を伴う使用の難しさという点について、木田・清水(2013)は「形」「意味・機能」「使い方」の文法の三要素の中でも「いつ、どこで、だれが、だれに、何について、どのように」といった「使い方」の知識が学習者には不足していることを現在の日本語教育が抱える課題として述べている。また、野田(2013)もこれまで一般的に教授されてきた汎用性が高そうに見える文法の中にも、使用目的がはっきりしないために使えないということがあることを指摘している。これらの先行研究でも述べられているように、対のある自他動詞に限らず、学習者に文法の指導を行う際には「形」や「意味・機能」に加えて、「いつ、どこで、どのように使うのか」といった「使い方」が明示的に提示されることが望ましい。そこで本稿では文法の「使い方」に焦点を当てるため、日本語の事態の捉え方を明らかにした廣瀬(2011)の「言語使用の三層モデル」を援用し、「使い方」の観点から対のある自他動詞の特徴を探る。

2.1 私的自己中心の日本語

廣瀬(2011)が提唱した言語使用の三層モデル^[註2]では、状況を捉えて言語化する主体を「私的自己」(思考・意識の主体)と「公的自己」(伝達の主体)の2つの側面に分け、日本語は「私的自己中心」の言語であると述べている。私的自己中心の言語とは、無標の表現形態が私的表現であること、つまり、終助詞の「よ」や丁寧体の「です」「ございます」などを用いなければ、思いを言語化しただけで伝達意図を想定しないと解釈される言語のことである。以下の(2)は私的表現、(3)は公的表現の例である。

(2) 今日は日曜日だ。

(3) a. 今日は日曜日だよ。

b. 今日は日曜日です。

c. 今日は日曜日でございます。

(廣瀬2012: (13)–(14))

廣瀬(2011)によると、私的自己中心である日本語は図1のように「状況把握」

と「対人関係および状況報告」（以下、「状況報告」）の2つの認知的側面に分けることができる^[註3]という。「状況把握」は話し手が自由に状況の中に身を置くことによって、状況内から状況を捉えることができるため、すでに自分の意識の中に確立していることを有標で言語化する必要はない。一方、「状況報告」は「対人関係」と一体化しているため、話し手は聞き手と自己との特定の関係が明確になるよう、対人関係の視点ができるだけ有標で言語化されなければならない。つまり、それぞれの側面の特徴としては「状況把握」では、すでに自分の意識内に確立されているものは有標で言語化する必要がないため、無標の言語形式を取り、「状況報告」の側面では、常に対人関係を認識する必要があるため、対人関係の視点を考慮した有標の言語形式を取る必要があるということである。

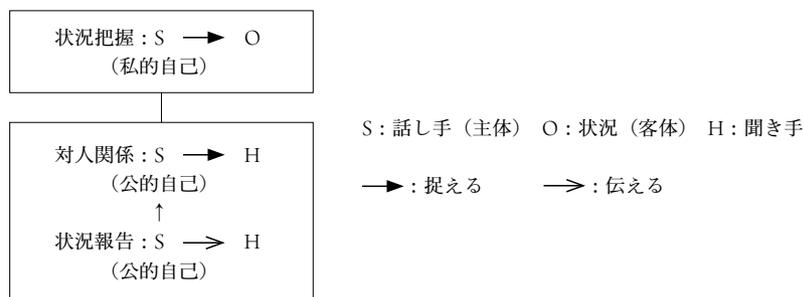


図1 私的自己中心の日本語（廣瀬2012を筆者が一部改変）

ある言語表現がそれぞれの認知的側面、つまり状況把握または状況報告であるかを判断するには、言語化する主体が「私的自己」と「公的自己」のどちらであるかを判断する必要がある。廣瀬（2012）ではその判断の基準として、「よ」や「ね」などの一定の終助詞、「立ちなさい・立ってください」などの応答表現、「おい」などの呼びかけ表現、「はい・いいえ」などの応答表現、「です・ます」など丁寧体の助動詞、「(だ) そうだ」などの伝聞表現などの聞き手の存在を前提とした表現を挙げている。これらの表現は「公的自己」の視点で述べられた表現であり、話し手の心的状態に対応した思考動詞と共起できない。具体的に

は(4)、(5)のようなものである。

- (4) a. 春男は、〈雨にちがいない〉と思っている。
- b. 春男は、〈雨だろう〉と思っている。
- (5) a. *春男は、[雨だよ] と思っている。
- b. *春男は、[雨です] と思っている。

（廣瀬2012: (5)–(6) 〈 〉は私的表現、[]は公的表現）

(4)のような思考動詞と共起できる文や句は私的自己の発話として認知し、「話し手の思いを言語化しただけで聞き手への伝達意図が想定されないレベル」（廣瀬2012:4）の言語表現、「私的表現」となる。一方、(5)のような思考動詞と共起できない文や句は公的自己の発話として認知し、「聞き手に対する話し手の伝達意図が想定されるレベル」（廣瀬2012:4）の言語表現、「公的表現」となる^[註4]。

私的表現と公的表現は、ある言語表現を使用する際に個々の文脈において、話し手が実際の聞き手や（自己や他者を問わない）心内の聞き手を想定しているのか、もしくは自己の意識の表出のみなのかによって、言語表現自体が変わることを表している。つまり、この私的表現と公的表現には、話し手の何らかの意図が含まれた「使い方」の異なりが表れていることになる。

2.2 状況把握／状況報告の自他動詞

本節では、2.1で述べた私的表現と公的表現による「使い方」の異なりを捉え、対のある自他動詞には従来の形態的・意味的・機能的な分類だけではなく、「使い方」による分類が存在することに注目する。

対のある自他動詞は、形態や統語的な違いに加え、意味・機能の観点から以下の(6)のような例を用いて、対のある自動詞は「変化の結果」に、対のある他動詞は「動作の遂行」に視点があると教授されることが多い。

- (6) a. ドアが開いた。 (変化の結果)
- b. ドアが開いたよ。 (変化の結果)
- c. ドアを開けた。 (動作の遂行)

d. ドアを開けたよ。(動作の遂行)

(7) a. 私は、〈ドアが開いた〉と思っています。(状況把握)

b.*私は、[ドアが開いたよ]と思っています。(状況報告)

c. 私は、〈ドアを開けた〉と思っています。(状況把握)

d.*私は、[ドアを開けたよ]と思っています。(状況報告)

(6) を思考動詞と共起させると (7) となり、(7) a. c. は話し手の思いを言語化しただけで、聞き手への伝達意図が想定されない私的表現、認知的側面としては「状況把握」となり、(7) b. d. は聞き手に対する話し手の伝達意図が想定される公的表現、認知的側面としての「状況報告」となる。

つまり、従来、対のある自動詞は「変化の結果」、対のある他動詞は「動作の遂行」と教授されることが多かったが、「変化の結果」や「動作の遂行」という動詞の意味・機能から見た側面以外に、その文にはどのような話し手の意図が含意されており、それは「事態を把握するのか」「事態を他の誰かに報告するのか」という使い方によって、対のある自他動詞をさらに細かく状況把握の自他動詞と状況報告の自他動詞に区別することも可能であると言える。

対のある自動詞	対のある他動詞	状況把握の自動詞	状況把握の他動詞
		状況報告の自動詞	状況報告の他動詞

図2 「意味・機能からみた自他動詞」と「使い方からみた自他動詞」

3 BCCWJからみる状況把握／状況報告の自他動詞の使用

3節では状況把握の自他動詞と状況報告の自他動詞が、日本語の書き言葉としてどの程度使用されているのかを「あく－あける」「あいている－あけている」「決まる－決める」「決まっている－決めている」「壊れる－壊す」「壊れている－壊している」の対を対象に調査する。

3.1 使用コーパスと調査対象語

本調査では、コーパス検索アプリケーション「中納言」で「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese : 以下、BCCWJ) (コアデータ・非コアデータ) を利用して調査した。「中納言」とBCCWJを利用した理由は、「中納言」は形態論を利用した高度な検索が可能であり、検索結果の一括ダウンロードが10万件までできること、BCCWJは規模、学術的信頼性の点で日本語コーパスの代表格と言えることから、日本語の書き言葉におけるおおよその傾向をつかむことができることにある。

調査対象語は「あく－あける」「あいている－あけている」「決まる－決める」「決まっている－決めている」「壊れる－壊す」「壊れている－壊している」とした。これらを調査対象語として選んだ理由は、以下の2点である。

①「あく－あける」はその動作が具体的であり、視覚的に結果を捉えることができるため、日本語教育において対のある自他動詞の典型的な例として使われることが多い。「決まる－決める」はその動作が抽象的であり、結果も視覚的に捉えることはできないことに加えて、伊藤 (2012b) において、自動詞「決まる」は文脈によって他動性の強度が判断しにくい動詞であることが指摘されている。また、「壊れる－壊す」は「窓が壊れた」のような具体的な動作に加えて、「人間関係が壊れた」のような抽象的な出来事にも使用される点で「あく－あける」「決まる－決める」とは異なる。

②寺村 (1982) は対立の形式として、「あく－あける」は形態的には自動詞から他動詞へ派生しているようだが、動詞の性質としては自他動詞が互いに引き合っていること、「決まる－決める」は他動詞から自動詞への派生が強いこと、「壊れる－壊す」は独立して互いに引っ張り合っているとみるほうがよいことを指摘している。これらから「あく－あける」「決まる－決める」「壊れる－壊す」の3種類の対のある自他動詞は、異なる特徴を十分に備えていると判断した。

そして、それぞれの対のある自他動詞を「あく系」「あける系」「あいている系」「あけている系」「決まる系」「決める系」「決まっている系」「決めている系」「壊れる系」「壊す系」「壊れている系」「壊している系」に分け、その使用例数と頻度を比較した。なお、「開く」の語彙素の読みの中には「ヒラク」として

登録されているものもある。そのため、「開く」と抽出された結果が「あく」と読むものなのか、「ひらく」と読むものなのか、の判断は、語彙素の読みが「アク」「ヒラク」であるものの結果をすべて抽出したうえで、目視で行った。以上の手順を踏んでいるため、本稿では「あくーあける」「あいているーあけている」はひらがな表記としている。

3.2 調査方法

本稿の主眼は日本語学としての自他動詞の解明ではなく、日本語教育において対のある自他動詞の理解を促進させる有効な方法を検討することにある。そこで本稿では、書き言葉に現れる対のある自他動詞の活用レベルを対象に、まず、状況把握の自他動詞では、以下の辞書形と思考動詞の2つの形式で共起するものを抽出した。思考動詞は例として「と思う」とし、後ろに続く形式(テンス・アスペクトなど)を制限しないように「と思」という形式で抽出した。

①辞書形 4形式 (～／～ない。／～た。／～なかった。)

eg. 「あく」: 「あく。」 「あかない。」 「あいた。」 「あかなかった。」
「あいている」: 「あいている。」 「あいていない。」 「あいていた。」 「あいていなかった。」

②思考動詞 4形式 (～と思／～ないと思／～たと思／～なかったと思)

eg. 「あく」: 「あくと思」 「あかないと思」 「あいたと思」 「あかなかったと思」
「あいている」: 「あいていると思」 「あいていないと思」 「あいていたと思」 「あいていなかったと思」

状況報告の他動詞では、廣瀬(2012)が状況報告の自他動詞の判断方法の例として挙げている以下の5つの形式を抽出した。

③終助詞「よ」 4形式 (～よ／～ないよ／～たよ／～なかったよ)

eg. 「あく」: 「あくよ」 「あかないよ」 「あいたよ」 「あかなかったよ」
「あいている」: 「あいているよ」 「あいていないよ」 「あいていたよ」 「あ

いていなかったよ」

④終助詞「ね」 4形式 (～ね／～ないね／～たね／～なかったね)

eg. 「あく」: 「あくね」 「あかないね」 「あいたね」 「あかなかったね」
「あいている」: 「あいているね」 「あいていないね」 「あいていたね」 「あいていなかったね」

⑤応答表現「てください」 2形式 (～てください／～ないてください)

eg. 「あく」: 「あいていてください」 「あいていないください」
「あいている」: 「あいていてください」 「あいていないください」

⑥丁寧体の助動詞「ます」 4形式 (～ます／～ません／～ました／～ませんでした)

eg. 「あく」: 「あきます」 「あきません」 「あきました」 「あきませんでした」
「あいている」: 「あいています」 「あいていません」 「あいていました」 「あいていませんでした」

⑦伝聞表現「(だ) そうだ」 4形式 (～そう／～ないそう／～たそう／～なかったそう)

eg. 「あく」: 「あくそう」 「あかないそう」 「あいたそう」 「あかなかったそう」
「あいている」: 「あいているそう」 「あいていないそう」 「あいていたそう」 「あいていなかったそう」

調査方法は、上記の状況把握の自他動詞2形式、状況報告の自他動詞5形式の計7形式をそれぞれ抽出し、さらに3.1で述べたように「開く」の語彙素の読みの中には「ヒラク」となっていたり、自他動詞の言い換えができない用法などが混ざっていたりすることから、対のある自他動詞を目視で確認した。そして、「あくーあける」「あいているーあけている」「決まるー決める」「決まっているー決めている」「壊れるー壊す」「壊れているー壊している」のそれぞれの対ごとに状況把握の自他動詞と状況報告の自他動詞の使用例数と頻度をみた。

3.3 調査結果と考察

対のある自他動詞の抽出結果をまとめたものが表1である。なお、列名の「BCCWJ抽出総数」はBCCWJの検索によって各系で抽出された総数であり、「対のある自他動詞数」は総数のうち、自他を交換した場合も意義に同一性が

表1 対のある自動詞の抽出結果まとめ（（ ）内は全体に対する割合）

自動詞／他動詞の別	動詞のタイプ	BCCWJ抽出総数	対のある自動詞数(%)	対における自動詞の割合
自動詞	あく系	495	133 (26.9%)	47.0%
	あいている系	227	65 (28.6%)	
	決まる系	1344	768 (57.1%)	
	決まっている系	886	240 (27.1%)	
	壊れる系	158	99 (62.7%)	
	壊れている系	32	16 (50.0%)	
	小計	3142	1321 (42.0%)	
他動詞	あける系	1242	170 (13.7%)	53.0%
	あけている系	98	53 (54.1%)	
	決める系	1759	940 (53.4%)	
	決めている系	425	195 (45.9%)	
	壊す系	68	24 (35.3%)	
	壊している系	14	6 (42.9%)	
	小計	3606	1388 (38.5%)	
合計		6748	2709 (40.1%)	100.0%

保たれる対のある自動詞と判断した数である。また、「対における自動詞の割合」は自動詞対ごとに比較した場合の自動詞対の出現割合である。

表1をみると、対のある自動詞と対のある他動詞の間で使用例数・頻度・割合のすべてにおいて語による差がある。本調査の抽出が自動詞も他動詞も使用できる場面から抽出されたものであることを考えると、日本語学習者にとって語によって現れ方の異なる対のある自動詞の選択がいかに難しいかがよく分かる。

次に、本調査の目的である状況把握の自動詞、状況報告の自動詞の分類にそって、結果をまとめたものが表2である。状況把握と状況報告を比べた際に、数値が高いものには網掛けをした。

表1と同様に対のある自動詞と対のある他動詞の間で使用例数・頻度・割合のすべてにおいて語による差があることが分かる。しかし、表2のそれぞれの語における「状況把握」と「状況報告」の割合に目を向けてみると、「決まっ

表2 状況把握の自動詞および状況報告の自動詞の使用頻度

自動詞／他動詞の別	状況把握／状況報告の別	動詞のタイプ	BCCWJ抽出総数	対のある自動詞数(%)	把握・報告の割合	
自動詞	状況把握	あく系	399	110 (27.6%)	82.7%	
	状況報告	あく系	96	23 (24.0%)	17.3%	
	状況把握	あいている系	159	35 (22.0%)	53.8%	
	状況報告	あいている系	68	30 (44.1%)	46.2%	
	状況把握	決まる系	684	451 (65.9%)	58.7%	
	状況報告	決まる系	660	317 (48.0%)	41.3%	
	状況把握	決まっている系	553	118 (21.3%)	49.2%	
	状況報告	決まっている系	333	122 (36.6%)	50.8%	
	状況把握	壊れる系	38	10 (26.3%)	10.1%	
	状況報告	壊れる系	120	89 (74.2%)	89.9%	
	状況把握	壊れている系	18	5 (27.8%)	31.3%	
	状況報告	壊れている系	14	11 (78.6%)	68.8%	
	小計			3142	1321 (42.0%)	
	他動詞	状況把握	あける系	1042	141 (13.5%)	82.5%
状況報告		あける系	200	30 (15.0%)	17.5%	
状況把握		あけている系	81	48 (59.3%)	90.6%	
状況報告		あけている系	17	5 (29.4%)	9.4%	
状況把握		決める系	1118	729 (65.2%)	77.6%	
状況報告		決める系	641	211 (32.9%)	22.4%	
状況把握		決めている系	281	122 (43.4%)	62.6%	
状況報告		決めている系	144	73 (50.7%)	37.4%	
状況把握		壊す系	37	9 (24.3%)	37.5%	
状況報告		壊す系	31	15 (48.4%)	62.5%	
状況把握		壊している系	9	4 (44.4%)	66.7%	
状況報告		壊している系	5	2 (40.0%)	33.3%	
小計				3606	1389 (38.5%)	
合計				6748	2710 (40.2%)	

ている系」「壊れる系」「壊れている系」「壊す系」以外の8つの系の語において「状況把握」が「状況報告」よりも高い、もしくはほぼ同じ割合で使用されていることが分かる。

3.4 考察

表1、表2の結果から、日本語の書き言葉においては自動詞・他動詞という動詞の性質で使い分けられている側面も見られるが、それに加えて、自動詞・他動詞にかかわらず、その動詞で何を表すのか（状況を把握しているのか、状況を誰かに報告しているのか）という言語化の意図を意識した使い分けも行っていることが分かる。以下では、動詞対ごとの使われ方について考察を加える。

3.4.1 あく系・あいている系／あける系・あけている系

まず、あく系は状況把握が多く出現しており、その中でも「あいた」の形式の出現頻度が最も高かった。これは「(ドア・戸・幕など)があいた」のように状況把握の自動詞を用いることで、場面転換の役割を果たしていることに起因していると思われる。また、あいている系でも同様に「(窓・穴など)があいている」という状況把握の形式が場面転換として機能していた。また、あいている系の状況報告では「あいています」という形式の出現頻度が最も高く、「(窓や店など)があいています」などのような前文脈で話されていた状況の連続性を描写する使用が窺えた。

あける系、あけている系の使用では、あく系・あいている系と同じく状況把握での使用が多く、「(ドア・戸・口など)をあける／あけていた」の形式で出現し、その役割も同様に場面転換となっている。つまり、従来の自動詞・他動詞という区別では、その使い方において同様の場面転換という役割が表れていたため使い方の区別はなかったが、状況把握の自他動詞、状況報告の自他動詞として区別することで、状況把握の自他動詞には場面転換という使い方を新たに捉えることができる。

3.4.2 決まる系・決まっている系／決める系・決めている系

続いて、決まる系、決まっている系は決まる系は状況把握の割合が高く、決

まっている系は状況把握と状況報告の出現頻度がほぼ同じ割合を示している。その使われ方は決まる系の状況把握では「(開催・組織や人事の進退など)が決まる／決まった」という形式で多く用いられ、状況把握として新たな場面への導入に使われている。また、決まっている系の状況報告では「(ルール・範囲など)が決まっています」や「まだ」と共起して「まだ(予定・予算など)が決まっています」という形式で、状況の連続性を描写している。決める系、決めている系は決まる系と同じく、状況把握の割合が高く、「(検討事項など)を決める／決めた」「(方法など)で決める」という形式が多く使われ、場面転換の役割を果たしている。状況報告では質問に回答する際に物事の順序や自分自身の行動の順序を説明するために「まず～を決めます」「～を決めました」「(予定・流れ)を決めています」という形式が主に使用されている。

3.4.3 壊れる系・壊れている系／壊す系・壊している系

最後に、壊れる系、壊れている系、壊す系、壊している系はいずれも全体としての出現頻度数が少なく、使用される形式による傾向は述べられない。しかし、壊れる系、壊れている系、壊す系はいずれも状況報告の割合が高く、今回の調査では状況報告で使われやすい傾向がみられた。特に出現頻度が突出している壊れる系の状況報告では「(~をしたら)が壊れます／壊れました」という形式がわずかな使用例の中では多く現れていた。

3.4全体の動詞対ごとの結果を踏まえると、それぞれの形式において状況把握／状況報告の自他動詞が使用されている様子が見られた。特にその使い方をみることで、書き言葉における状況把握の自他動詞は場面転換に、状況報告の自他動詞は状況の連続性の描写に使用されている様子も窺うことができた。

4 まとめと今後の課題

本稿では、対のある自他動詞を状況把握の自他動詞と状況報告の自他動詞に分け、「中納言」でBCCWJを用いて、日本語の書き言葉における「あく－あける」「あいている－あけている」「決まる－決める」「決まっている－決めている」「壊れる－壊す」「壊れている－壊している」の状況把握の自他動詞と状

況報告の自他動詞としての使われ方をみた。その結果、「決まっている系」「壊れる系」「壊れている系」「壊す系」以外の8つの系の語において「状況把握」が「状況報告」よりも高い、もしくはほぼ同じ割合で使用されていることが分かった。このデータから日本語の書き言葉においては自動詞・他動詞という動詞の性質で使い分けしている側面もみられるが、それに加えて、状況を把握しているのか、状況を誰かに報告しているのか、という発話の意図を意識した使い方も行っていることが示唆された。

しかし、本稿では上記のような結果が得られるとともに、幾つかの課題もみられた。まず一点目は、本調査はBCCWJの大量のデータから傾向をみる調査であったが、状況把握／状況報告の自他動詞がすべてのジャンルで同様に現れるものであるのかは本調査では明らかにできていない。今後はジャンルごとに調査するなど、より詳細な調査の必要がある。二点目は本稿の出発点でもある日本語教育への還元についてである。本調査では文法の「使い方」に焦点を当てるという観点から、状況把握／状況報告の自他動詞を提案し、BCCWJのデータでその使われ方を示した。しかし、具体的に状況把握／状況報告の自他動詞をどのように日本語教育に取り込んでいくのかについては、日本語学習者に対する状況把握／状況報告の自他動詞の教授においてのデータが必要となるため、今後の課題としたい。本稿はこれらの課題を含みながらも、状況把握／状況報告の自他動詞という新たな捉え方を提案した点に意義があると考え。今後は、より詳細なデータを示しながら、日本語教育への応用を考えていきたい。

〈筑波大学〉

注

[注1] …… 寺村（1982）では、形態的な対立があり、共通の語根（Root）から派生したと見られるものを「相対自動詞」「相対他動詞」とし、中石（2005a）では日本語の初級教科書で自他動詞対として指導される「入る－入れる」を加え、「対のある自動詞」「対のある他動詞」とした。本稿では日本語教育における自他動詞対を扱うことから「対のある自動詞」「対のある他動詞」という用語を使用する。

[注2] …… 言語使用の三層モデルは日英語の差異を認知言語学的主観性、社会言語的対人意識、言語における自己中心性の3つの観点から述べたものである。本稿では学習者の対のある自他動詞の習得について語用論的知識を中心に述べることから、社会言語的対人意識としての日本語の特徴に焦点を当てている。

[注3] …… 廣瀬（2011）では、言語使用は「状況把握」（私的自己による思いの形成）、「状況報告」（公的自己による思いの伝達）、「対人関係」（公的自己による聞き手への配慮）という3つの層があり、言語のもつ自己中心性が公的自己と私的自己のどちらにあるかで、3つの層の組み合わせが変わること（英語は状況把握と状況報告が一体化し、対人関係が独立する公的自己中心、日本語は状況把握が状況報告と対人関係から独立する私的自己中心）が述べられている。

[注4] …… この区別は、伝達性を保証することが重要であるため「命題」「モダリティ」と関連はするが、一致はしない。ただし、「命題」「モダリティ」も日本語の無標性を捉えるためには重要な概念であると考え。

参考文献

- 伊藤秀明（2012a）「学習者は「対のある自他動詞」をどのように使っているか—中国人日本語学習者の中級から超級に注目して」『国際日本研究』4, pp.43–52. 筑波大学人文社会科学研究所国際日本研究専攻
- 伊藤秀明（2012b）「相対自動詞・他動詞選択判断の要因—中国人大学生の場合」『国際交流基金日本語教育紀要』8, pp.7–21. 国際交流基金
- 奥津敬一郎（1967）「自動化・他動化および両極化転形—自・他動詞の対応」須賀一好・早津恵美子（編）『動詞の自他』pp.57–81. ひつじ書房
- 木田真理・清水まさ子（2013）「学習者の文法と教師の文法—ノンネイティブ日本語教師研修を通して」『日本語学』32(7), pp.50–60.
- 小林典子（1996）「相対自動詞による結果・状態の表現—日本語学習者の習得状況」『文芸言語研究言語篇』29, pp.41–56. 筑波大学文芸・言語学系
- 小林典子・直井恵理子（1996）「相対自・他動詞の習得は可能か—スペイン語話者の場合」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』11, pp.83–98. 筑波大学留学生センター
- 寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
- 中石ゆう子（2005a）「対のある自動詞・他動詞の第二言語習得研究—「つく－つける」、「きまる－きめる」、「かわる－かえる」の使用状況をもとに」『日本語教育』124, pp.23–32. 日本語教育学会
- 中石ゆう子（2005b）「学習者は自動詞、他動詞を使い分けしているのか？—発話調査を用いた対のある自他動詞に関する習得研究」南雅彦（編）『言語学と日本語教育Ⅳ』pp.151–161. くろしお出版
- 野田尚史（2013）「オーダーメイドの文法」をめぐって」『日本語学』32(7), pp.62–71.
- 早津恵美子（1987）「対応する他動詞のある自動詞の意味的・統語的特徴」『言語学研究』6, pp.79–109. 京都大学言語学研究会
- 廣瀬幸生（2011）「公的自己・私的自己の観点と主体性の度合い—言語使用の三層モデル」

『日本英文学会第83回大会 Proceedings / 2010年度支部大会 Proceedings』 pp.243-245.

日本英文学会

廣瀬幸生 (2012) 「主観性と言語使用の三層モデル」『言語と(問)主観性フォーラム in 仙台 発表資料』 pp.1-13.

本居春庭 (1828) 「詞の自他の事 (『詞の通路』より)」須賀一好・早津恵美子 (編) 『動詞の自他』 pp.7-12. ひつじ書房